

府中市史編さんだより

第3号 平成29年(2017)3月29日



昭和23年空撮 (撮影：米極東空軍)



平成12年空撮 (撮影：府中市)

ふちゅう温故知新②

朝日町周辺

府中市の東端に位置する朝日町は調布市・三鷹市に隣接し、市内でも独特な歴史的なあゆみを辿った場所です。この地域は府中市が昭和29年(1954)に市制を施行する以前は北多摩郡多磨村に属し、近世から近代はじめには押立山谷という村(昭和14年当時の家屋数19戸)があり、のどかな農村風景や雑木林が広がっていました。

しかし昭和16年(1941)には旧陸軍の要請により、東京府がこの地にあった押立山谷地区を買収して調布飛行場が建設されました。調布飛行場は官民共同の飛行場として計画されましたが、戦時中は防空、訓練用の軍専用の飛行場として使用されていました。飛行場の周囲には当時を物語る遺構として戦闘機を格納した掩体壕(4基)が現在も残っています。

戦後は米軍に接收され、昭和21年(1946)6月、調布飛行場の西側一帯(現在の朝日町三丁目の朝日町通り側)に、在日米軍により野菜の水耕栽培の実用施設としては世界初の調布水耕農場(写真左中央、米陸軍総合補給廠：面積

は126ha)の建設が開始されました。突貫工事の末、水耕農場は同年12月には稼働しています。温室で栽培されたレタスやトマトなどの野菜は貨車(西武多摩川線)に積み込まれ出荷されました。

その後、調布飛行場東地区には再び米陸軍飛行部隊が一時駐屯し、昭和35年(1960)まで使用されましたが、昭和36年(1961)、その役目を終えて閉鎖となり、その後は昭和39年(1964)の東京オリンピック開催に伴う選手村建設のため、代々木にあったワシントンハイツ(米軍家族住宅)代替施設として、「関東村」(220棟、880戸)の名称で約12年間使用されました。

昭和48年(1973)までに段階的に基地は返還され、以降新たに道路の整備が行われたり公園や公共施設などが次々と建設されていきます。現在基地跡地には写真右のように東京外国語大学、警察大学校、榊原記念病院、養護学校、高齢者福祉施設、総合スポーツ施設、下水処理場、武蔵野の森公園など20の施設が設置され、あたりの風景は大きく変貌しました。

「さまざまな視点から地域の歴史を考えてみる」

中世専門部会長・早稲田大学文学学術院教授
海老澤衷先生

このコーナーでは、市史編さん専門部会で部会長をお願いしている先生方に直接インタビューして、それぞれの部会で考えていることや活動についてお聞きしています。今回は中世専門部会の海老澤衷先生にお話を伺いました。

さまざまな視点から考えてみるのが面白い

事務局：最初に、海老澤先生の研究についてお伺いします。これまでの研究分野や内容などを教えていただけますでしょうか。

海老澤：私が大学院時代に研究したのは荘園です。最初は薩摩・大隅・日向にまたがる鎮西島津荘という荘園を対象として修士論文を書き、博士課程に進みました。その後、恩師である竹内理三先生から大分県で博物館を作るので、勤めてみないかというお話がございまして、赴任いたしました。そこで国東半島の田染荘（たしぶのしょう）に関わることになりました。1980年のことです。田染荘は宇佐八幡宮の荘園ですが、同時に国東半島には六郷満山という霊場がありました。平安時代に中央の文化が移入され、非常に栄えたことで有名であったのですが、その六郷満山文化に関わるものが田染荘にあった訳です。

従来の荘園研究は、社会経済史というかたちで研究が深められていたのですが、私はどうもこれに今一つ満足できませんでした。荘園現地を踏まえた研究にはなっていないのではないかという思いがありました。さいわい田染荘では、勤務した大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館（現在の県立歴史博物館）で、色々な共同調査ができました。考古学・民俗学・保存科学・美術史の人々の協力を得て研究を進め、その結果、現地調査に基づく荘園研究というスタイルを確立できたわけであります。このような研究においては、博物館と教育委員会が持つ機能が非常に重要でして、現在まで私の中で大変大きな意味をもっています。そういった経験から、共同で研究を行なうことが、荘園研究では重要であるということが分かったのです。

事務局：地域の歴史を考えるには、まず現地に

飛び込むことが大切なのですね。

海老澤：大分で七年間程、研究をいたしまして、『豊後国田染荘の調査』という報告書を1987年にまとめました。同年4月から早稲田大学で教鞭をとることになり、さらに荘園研究を進めていくことが出来ました。最初は和歌山県の鞆淵荘（ともぶちのしょう）で調査を行ないました。ここは近くの高野山金剛峰寺と密接な関係をもっていますが、当初は石清水八幡宮の荘園であったのです。大分の田染荘でも宇佐八幡宮、和歌山の鞆淵荘でも石清水八幡宮が中心にあった。そして府中市にも国府八幡宮があり、私の住む国分寺市にも元町八幡宮があります。八幡宮は私にとって非常に身近な存在です。今回の市史でも八幡宮に注目したいと思っています。

2003年には21世紀COEという文部科学省の補助事業がありまして、アジア地域エンハンシング研究センターが早稲田大学に設立されました。私が担当した調査対象が、インドネシアのバリ島でした。そこででもスタッフに恵まれ、関係の報告書を3冊出すことが出来ました。日本は梅雨時にため池に水をためて、夏期にその水を少しずつ、計画的に使って稲を育てていきますが、バリ島では稲を作るためのため池はひとつもありません。その代わり水路が大変発達しておりまして、トンネルの用水路もたくさんあります。

その頃、バリ島の調査と平行して、愛媛の弓削島の調査を行ないました。ここは塩業で著名なところですが、荘園領主は東寺という京都の寺院で、塩を年貢として納める場所でした。そこで塩業に関心をもったのですが、弓削島には塩田はまったくなくなっていました。また水田も現在ではまったくありません。ただし水田があったときに使っていたため池は残っていました。そういうわけで日本における変化は大きいものだと実感したのです。

その後、備中国新見荘（にいみのしょう）で大規模な調査を実施しました。新見荘は紙や漆や鉄を年貢として東寺に納める荘園です。東寺の前の荘園領主であった小槻氏が、鎌倉時代に

鉄生産を行ない、鉄年貢を納めさせていたのです。現在の新見市では新見荘に大変多くの方が関心を持っていて、たたら製鉄を復元してみようという人たちがいるんですね。実験工房がありまして、毎年そこで鉄を作っています。そこで私は、中世の鉄生産がどういうものかということを知ることが出来ました。そして新見荘を、製鉄を頭において調査すると、見えてくるものが変わってきました。この地域では砂鉄がたくさん採れたわけですが、砂の中の酸化鉄を採ることによって、大量の廃土が出ます。そのことによって、鉄を取ったあとは美しい水田が出来ていくことを知ったのです。鉄生産と水田農耕が結びつくということです。また日本刀の生産地として有名な備前長船まで新見荘の鉄が運ばれていることも分かりました。たたら製鉄が日本人に大変関係の深いことが分かるのですが、いまでは忘れ去られてしまっています。

以上のようなことを考えてきまして、いよいよ府中市史を始めることになった訳です。

歴史的な景観も保存することが大切

事務局：ご研究のフィールドが大変広域なので驚きました。先生は歴史的景観の保存にも取り組んでいらっしゃるって伺いましたので、そのお話をお聞かせください。

海老澤：今まで申し上げてきましたように、私は荘園を研究してきました。そういった経験から、現地景観を保存することが重要だと考えるようになりました。これは地域の人々の現在の生活と関わることでありますから、昔ながらの水田をありのままに保存することは大変なことなのです。さいわい世界的に景観保存が注目されるようになり、中世の村落景観を出来るだけ保存しようという活動が、20世紀末からフランスを中心に盛り上がります。フランスの場合はブドウ畑ですが、日本でいえば水田です。特に景観的にはっきりしているのは棚田でして、山間部で20度以上の傾斜があるところが棚田の景観を示すと言われていました。ヨーロッパでは典型的なブドウ畑がやや傾斜地にあるのですが、そういったものを保存し、活用していこうという世界的な動きが出ています。中国では棚田の保存を国家政策として行っています。

日本でも田染荘は中世以来の景観を示してお

り、保存しようということになりました。21世紀になってから「重要文化的景観」というものを文化庁が新たに選定しています。最近では京都の琵琶湖疎水が選ばれましたが、田染荘もこの重要文化的景観に選ばれました。また農林水産省でも「棚田百選」という事業を起こしています。そのような経緯から、現在、文化財審議会という国の機関で重要文化的景観の担当専門委員をしております。そういった目で府中を見ますと、大國魂神社を中心とする景観には大変関心があります。ここから新たな市史を作り出すことができると考えています。

府中の中世史の魅力とは

事務局：府中の中世史の魅力や編さんにあたっての課題についてお聞かせください。

海老澤：中世史研究においては70年代半ば頃に非常に大きな画期がありました。それまでは文字史料だけに頼る傾向にありましたが、70年代半ばから民俗学・考古学・美術史といったものを含みこんで歴史を考えていこうという潮流が生まれました。その時期に大変努力された先生が、石井進先生、網野善彦先生、藤木久志先生、峰岸純夫先生であります。このような方たちが地域の教育委員会や博物館の活動に大きな刺激を与えました。私の研究も、このような70年代半ばからの流れと重なると言えるでしょう。そういう面から中世府中をみると、大変面白いところがあります。

まずなんとといっても六所宮（大國魂神社）の



海老澤 衷 先生

存在が大きいですね。これは鎌倉幕府にとって大きな存在でして、『吾妻鑑』には、まだ頼朝が蜂起してから間もない寿永元年（1182）に、すでに尊崇されていたことが記されています。このような中世の総社や国衙と武士団の関係を明らかにされたのが石井先生でして、現在多くの市町村市史で活かされています。それから、府中はなんといいても国府でありまして、発掘調査によって「都市的な場」であったことが分かっています。「都市的な場」は中世史を考える上で大きなテーマですが、これは網野先生が生み出したものです。府中では「都市的な場」であることを象徴するような、大きな銭甕が二つも出ている。これほど大きなものは全国的にもあまり例がない。府中がいわゆる「都市的な場」であった証拠でしょう。

網野先生は非農業生産に関して幅広い研究があるのですが、府中で言いますと、善明寺の鉄造阿弥陀如来坐像が大変注目されるところで、この鉄仏は重量 380 キロ、座高 170 センチという大きさを誇るもので、かなり昔から六所宮の境内にあったことが分かっています。なにより鉄仏には建長 5 年（1253）2 月 16 日という銘文が残っており、まごうことなく鎌倉時代の製作です。鉄造の仏像は全国的に少ないのです。周防の阿弥陀寺には鎌倉時代に東大寺を復興した俊乗房重源という僧侶が作った鉄造宝塔が現存しますが、私は鉄のモニュメントとして、東の善明寺鉄仏、西の阿弥陀寺鉄造宝塔というふうに思っています。鉄製品を丹念に作り上げるといふ日本の伝統を、ここにみることが出来ます。鉄にはたたき上げて作る鍛造という方法と、鋳物を作る鋳造という方法があります。善明寺鉄仏は鋳造されたモニュメントとして大きな意味があります。

先ほど新見荘で触れましたが、砂鉄からたたら製鉄を行なう場合には、鉄生産と水田農耕は密接に関係しています。水田農耕があるところには安定した集落が営まれ、何百年と続きます。そのために、日本では鉄生産も安定して行われ、非常に緻密な鉄生産の伝統が出来たといえます。府中のような「都市的な場」には、特に武蔵には鉄生産の伝統があるので、鉄製品が集まってきたと考えられます。そういったことの象徴として、善明寺鉄仏は重要です。今までは鉄生産に注目しておりましたが、非常によく

できた製品を見られるということは、私にとっても幸せなことであります。

さらに府中で発掘された中世遺構の中で注目すべきものに、地下式坑があります。この地下式坑と民衆について新たな視点から考えられたのが藤木先生です。藤木先生は庶民が逃げ込んだり、私財を隠したりした「村の城」の存在を、文献上明らかにされました。府中は比較的平らな場所ですが、山城がたくさんある自治体もあります。そういったところは、それまで力の強い武士の大きな城にばかり目がいていましたが、藤木先生の研究をきっかけに、小さな「村の城」にも関心が向くようになり、教育委員会や埋蔵文化財担当者によって発見されるようになりました。これは藤木先生なくしては考えられないことです。また、峰岸先生は中世東国史研究の大きな枠組みを作ると同時に、中世遺跡の発掘調査と保存運動に携わって来られました。

事務局：先生の幅広い研究を府中市史の編さんに反映していただけることが分かりました。市民も非常に楽しみにしていると思います。ぜひよろしくお願い致します。

これからの調査の中で、中世部会として取り組んでいく課題がございましたら教えていただけますでしょうか。

海老澤：今は主に史料調査を行ない、リストアップをしています。1155 年以降の平安時代、鎌倉時代、南北朝・室町時代、戦国時代に分けて史料を収集しておりまして、約 600 点の史料リストが出来ています。今後も継続していきたいと思っています。またあきる野市の名刹大悲願寺において調査させていただきまして、府中との関係を明らかにできることがあると確信をもったところですが、まだまだ府中に関する史料は多くありますので、調査を進めてまいりたいと思っています。

事務局：とても楽しみです。市史の中世資料編は平成 31 年度の刊行予定ですが、新しいことがたくさん分かるのではないかと思います。どうぞよろしくお願い申し上げます。

市史講演会 開催報告

講座・パネル展示「史料でみる近世府中の歴史～四谷村と多摩川～」を開催しました。

平成 28 年 11 月 27 日（日）に講座・パネル展示「史料でみる近世府中の歴史～四谷村と多摩川～」をスクエア 21・女性センターで開催し、市史編さんで進めている古文書調査の方法と、これまでの調査成果の一部を市民にご紹介しました。

講座では、近世専門部会委員が四谷の個人宅に伝えられてきた古文書の内容を解説しました（写真 1）。江戸時代の四谷村の人びとが新田開発に取り組んだ様子や、多摩川から田畑に水を

引くための用水の整備にさまざまな苦労があったことなどを紹介すると、参加者の皆様からは、「古文書から地域の歴史が明らかになることがわかり、興味深いと思いました」との感想をいただきました。

また、同日開催のパネル展示では、古文書や昔の多摩川の絵図を紹介し、その一部については、現在、ふるさと府中歴史館 2 階の公文書史料展示室で展示しています（写真 2）。

市史編さんでは、講演会を今後も開催してまいります。



（写真 1）講演会の様子



（写真 2）展示史料

催し物のご案内

ふるさと府中歴史館 市史編さん事業に関する展示

展示 1 「府中市史編さん事業紹介」

◆市史編さん事業の内容について、パネルでご紹介しています。

「最近の調査から」のコーナーでは、各部会で取り組んでいる調査から、最新の成果を展示しています。

◆ふるさと府中歴史館 1 階（国府展示室）にて常設展示中

展示 2 「史料でみる近世府中の歴史～四谷村と多摩川～」

◆昨年 11 月に開催した講座・パネル展示で紹介された古文書の実物を展示しています。

◆ふるさと府中歴史館 2 階（公文書史料展示室）にて開催中（平成 29 年 5 月 7 日（日）まで）



1 階
展示 1



2 階
展示 2

■ 専門部会通信 ■

前号以降の、専門部会の活動について紹介します。

原始・古代専門部会

文献と考古の2つの分野会を設け作業を進めています。文献分野会では、前号に記したように、「武蔵」や「武蔵国司」に関わる史料の採録を進めてきました。現在、採録した膨大な史料から、市史資料編に必要な史料の抽出と、抽出した史料に、府中市史として綱文（要約文）や解説が必要なものを選び出し、それを作る作業を進めています。

考古分野会では、市域に広がる1700ヶ所を超える調査地区について、出土品・検出遺構の抽出作業を進めています。市史資料編では、抽出した遺物・遺構の分布を示すことで、原始古代の府中市域の様相の差異を明らかにできるものと考えています。

また、前号で写真紹介した墨書土器など出土文字資料についても、現在府中市域出土資料のデータベース化を進めています。これによって、文字の持つ意味の分析と、出土地点の示す状況をオーバーラップさせた分析が可能になると考え、作業に取り組んでいます。



墨書土器集成作業風景（古代）

中世専門部会

昨年から引き続き、府中市に関わる文献史料の収集に努めています。源頼朝、新田義貞、足利氏、小田原北条氏、豊臣秀吉といった著名な人物たちが、府中市とどのように関わってきたのかが次第に明らかになってきました。

部会の際には市役所新庁舎発掘調査現場の中世遺構を視察するなど、豊富な発掘成果を市史に活かせるよう心がけています。

また、大國魂神社のご協力を頂いて同社の所蔵する「武蔵七党系図」の分析を進めています。武蔵武士の系譜が記された貴重な史料で、武士団の生き生きとした姿を描き出す手がかりとなると考えています。



市役所新庁舎の発掘調査（府中市遺跡調査会提供）

近世専門部会

市内の個人のお宅や寺社の古文書調査を継続しています。現在は、「目録調査」といって、古文書1点1点の情報を記録する作業を中心に行っています。情報の内容は、古文書のタイトルや簡単な内容、作成された年代や作成者・宛



古文書1点1点の情報を記録して、「目録」を作成する様子（近世）

先、古文書の形態や点数などです。こうした情報を記録しておくことは、古文書の散逸を防ぐためにも欠かせません。ここで作られた「目録」は、市史の資料編や通史編の基礎資料となるもので、市民の方が歴史を学ぶために古文書を探して活用する際にも役立ちます。

近・現代専門部会

前回から引き続き、ふるさと府中歴史館に保存されている行政文書の調査や、図書館に所蔵されている府中に関する書籍や史料の調査を行っています。また、市内の寺社や小学校のご協力をいただき史料の調査を行いました。

このほか、調布飛行場建設時に用地を買収され、さらに敷地内に掩体壕があった市民の方より、聞き取りや史料調査を行いました。



市立四谷小学校郷土資料室視察（近現代）

民俗専門部会

市内では様々な生業が営まれ、その暮らしぶりを反映した年中行事が行なわれています。民俗専門部会ではライフヒストリーを特集する報告書に引き続き、そうした年中行事を特集する

報告書の作成を検討しながら調査を進めています。写真は、平成28年12月17日に北多摩陸消防組第二区一番組の方たちが大國魂神社境内で正月飾りをつくっている様子です。12月25日、大國魂神社境内に独特の門杉（かどすぎ）や注連縄（しめなわ）などの正月飾りを奉納・設置すると本殿で注連縄奉納奉告祭を行ない、その夜には市内各所への飾りつけも行ないません。こうして周辺は新年を迎える装いとなります。



正月飾りをつくっている様子（民俗）

自然専門部会

東京農工大学と地域を結ぶネットワーク事業の一環として、大学に所属する研究者に専門分野の受託研究をお願いして、自然各部門の基礎資料の収集調査と調査データの研究分析に取り組んでいただきました。現在、動植物調査、大気汚染物質測定、水質調査、土壌地質調査の各部門において調査を進めていただいています。

また、気象調査では市内約30か所に設置した温湿度計により10分毎に記録される自動観測を継続しています。

市史編さんの活動記録

前号以降

～3月6日 原始古代・文献史料採録調査
 ～現在継続中 民俗・ライフヒストリー調査、
 講中調査
 ～現在継続中 自然・温湿度計測調査
 11月1日 近現代・図書館渡辺文庫調査
 11月14日～ 古代、墨書土器等集成作業
 11月24日 市史編さん審議会
 11月19日～ 特別展「府中市のなかの東京外国語大学」(東京外国語大学で開催、資料協力:市史編さん担当)

11月27日 講座・パネル展示「史料でみる
 近世府中の歴史～四谷村と多摩川～」
 (スクエア21・女性センターで開催)
 11月28日 近現代・個人宅資料調査
 11月29日 中世・近世・近現代・高安寺調査
 1月6日～2月10日 近現代・行政文書調査
 1月13日～ 原始古代、考古遺物実測等
 1月26日 近現代・民俗・四谷小学校郷土資料室視察
 3月2・3日 近世・善明寺古文書調査
 3月29日 市史編さん審議会

第2回 市川千秋さん

市史編さん担当がお会いした市民の方を特集するこのコーナーでは、古文書調査にあたりご協力をいただいた所有者を代表して市川千秋さんにご登場いただき、市川家や四谷の歴史、市史への想いを語っていただきました。

市史編さんでは、市内にある江戸時代などの古文書を調査しており、昨年は四谷地域を中心に調査を行いました。

市川千秋さんのご先祖は、江戸時代に書かれた『新編武蔵風土記稿』という書物によれば、戦国時代、甲斐（現在の山梨県）の武田氏、のちに相模（現在の神奈川県）の小田原北条氏の家臣で、北条氏の滅亡後に、四谷の地に「市川忠次（ただつぐ）」という人物が住みついたと記されています。市川さんは、「市川家に生まれた人の名前に「次」という字をつけることが多いのは、この地に来た初代の方が当時の市川家の次男だったからかもしれないですね」と話してくださいました。江戸時代の市川家の当主は、代々「三左衛門」と名乗りました。市川家は、江戸時代の中期頃から新田開発を盛んに行っていたようです。

昨年11月に市史編さんで開催した講演では、近世専門部会の委員が古文書を読み解いて、新田開発の様子を紹介しました。感想を伺うと「新田開発の詳しい経緯や結果については私の父の代でも伝わっていなかったのですが、今回古文書から、その頃の当主がどうしているかのかよくわかりました」との

こと。経済学の教授がご本職の市川さんは、新田開発のための資金がどこから来たのか興味があるそうです。

市川さんは、今を生きる若い人たちへ歴史から学ぶことの大切さを伝えたいと言います。「今の時代はちょうど、国際協調から自国優先へと転換していった1930年代と状況が似ています。その後に大きな戦争が起こり、多くの人が犠牲になりました。このような悲劇を繰り返さないように、歴史からたくさんを学んでほしいですね。過去の歴史は、五年先十年先の私たちを照らす鏡ですから」。

府中の歴史についても「先人の地域を愛する心とか暮らし方を学び受け継いでいくことが本当の地域創生につながると思います。今回の市史編さん事業がその一翼を担うものになると思います。古文書を使って地域の歴史を知ることによって地域に対する愛着心を育んでももらえれば、古文書をお見せした意味があると思います」と語ってくださいました。



前号以降、次の皆様にご協力をいただきました。ありがとうございました。（五十音順・敬称略）

石橋直美、市川閲子、市川千秋、市川紀子、市川仁、市川正弘、井上翔、井上正望、上村正裕、大熊雅弘、小澤宏、河北勇輔、菊地幹雄、小林尚子、櫻井茂祐、進藤礼治郎、菅野義雄、曾根原理、高木晴夫、高橋昇二、田口耕之助（故人）、田中昭男、田中忍、中村憲司、林雄一郎、藤田佳希、前田文恵、宮井迅吉、森憧太郎、山元義剛

安養寺、大國魂神社、北多摩陸消防組第二区一番組、車返本願寺結衆講、高安寺、善明寺、東京外国語大学、東京都埋蔵文化財センター、東京都立農業高校、東京農工大学、八幡宿講、府中市史談会、府中市立四谷小学校、公益財団法人府中文化振興財団、本町上組御嶽古峯講、本願寺、マインズ農業協同組合

府中市史編さんだより 第3号 平成29年(2017年)3月29日

編集・発行

府中市文化スポーツ部ふるさと文化財課市史編さん担当

〒183-0023 東京都府中市宮町3丁目1番地 ふるさと府中歴史館

TEL 042-335-4376 <http://www.city.fuchu.tokyo.jp/bunka/bunka/shishihensan/>